

宮城学院女子大学

Partir

[パルティール]

VOL.

12

2011.10

あなたのこれからに贈りたい
Live Letter from MG



01 誌上ゼミ

健康のための「住居」を考える
〜住まいの快適さとは？
エネルギーとの関わりは？〜

05 学問へのいざない

残された「歴史」を学ぶ
「食」から人の生活を学ぶ

07 特集

「地域になりたい！」熱い想いとともに…
「MG災害復興ボランティア」
座談会

09 ACTION

いま、私たちに
できること

11 My way Mg way

13 サークル紹介

14 CAMPUS NEWS

「Partir (パルティール)」はフランス語で「出発する」
新しい時代に飛び立とうとする女性たちを支え、励ますために、
宮城学院女子大学から発信するコミュニケーション情報誌です。

健康のための「住居」を考える

「住まいの快適さとは？ エネルギーとの関わりは？」

地球環境時代へ向けた建築の転換点へ

土壁による室内環境デザインの研究
伝統住居の叡智を活かす

林 私たちの研究室では、地球環境時代へ向けた住居・建築と生活への転換点を見出すことをテーマに、人間の健康のための住居のあり方を、快適性やエネルギーという問題も含めて考察しています。さらに近年では、現代住宅問題のひとつであるシックハウスに加え、カビやダニなどの生物汚染に関する原因と対策なども研究しています。

皆さんにも快適で健康的な住まいについて様々な観点から研究してもらっていますが、田中さんは今大学院で土壁による住まいづくりの研究をしていますね。

田中 はい。密閉した住まいでは建材に含まれる化学物質が人体に影響を及ぼしてしまいます。その一つの対策として自然素材である土壁を使った古民家の改修に興味を持ちました。

土壁の家は環境にも負担がかからないし、人の手で直せるというメリットもあります。ただ、断熱性に問題があるので、



屋上のボックスモデルで土壁の室内空気環境の影響を研究。

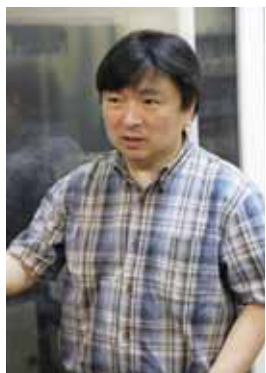
生活文化デザイン学科
(建築環境学研究室)

林基哉 教授



「建築環境学研究室」の皆さん
田中真央さん、菊池江梨さん、赤間美香さん、
水野令子さん、横山さくらさん、佐藤美帆さん、
菅原実優さん、難波亜也加さん





林基哉 教授

その点をクリアーにする「外断熱土壁」という手法に着目しました。

実際の土壁の住まいをお借りして外断熱改修の研究をしてきました。結果は温湿度とも壁内は安定するという結果が得られました。

何十年も何百年も住む家なので、長期的な実験が必要です。様々な観点から土壁が室内の空気環境に与える影響を学部生と緒に研究しています。

菊池 田中先輩の指導のもとで屋上に設置されたボックスモデルで実験しています。合板と断熱材、石膏ボードと断熱材、土壁のみ、土壁と断熱材という4つのモデルを用意し、長期間にわたり地道に温度と湿度のデータを収集し比較検討を



菊池江梨さん



田中真央さん



赤間美香さん

行っています。現在は化学物質の研究も行っています。

赤間 自然の素材を活かした住まいづくりに興味を持って、この研究に参加させていただいています。

土壁+断熱材のモデルが、温度も湿度も安定しているという結果が出ています。土壁外断熱の効果表れていると思います。

林 自然素材の利用は、建物の総合的環境性能評価においても見直されています。普及には多くの課題がありますが、正しいデータを得ることは重要なステップだと思います。

環境の変化によって 今注目されるカビの問題

林 研究室ではシックハウスに関して研究してきましたが、最近は化学物質の使用の抑制により、逆にカビやダニなどの生物汚染の問題が出てきています。震



災により浸水している被災住宅も多く、全国の研究者もカビの問題に注目しています。横山さんはカビの研究をしていますね。

横山ゼミのメンバーにもお願いして、5軒の家の床下・寝室・水回り・和室などから空気中のカビを採取してきてもらいインキュベーター（恒温器）で培養しています。カビの成長をデジタルカメラで記録し、図鑑と比較してカビの種類と数を特定してデータとして収集しています。

林カビには有毒ガスを出すものもあるので住まいを健康に保つという観点では、大切な研究対象で、多くの先進国で注目しています。

横山カビの発生は築年数・換気量などによってかなり差もでるようです。住まいのいろいろな箇所を採取することにより、カビがどのような経路で家全体に広がることが分かってくると思います。

林どこで増えてどのように移動するかカビの建築内でのライフスタイルがまだ分かっていない状況なので、横山さんの研究成果が期待されます。

住まいの様々な観点から地道な実験結果の積み上げ

林住環境はいろいろな観点からのアプローチが必要です。窓ガラスも住まいの快適さにとって重要なファクターです。

佐藤私は今、ガラスの遮熱・遮光効果実験をしています。屋上に3畳分くらいの6部屋の実験用の部屋を作り、それぞれの窓に、高断熱トリプルガラスや遮熱ペアガラスなどを設置し温湿度の変化を比較しています。

トリプルガラスはやはり遮熱性が高く、通常のガラスに比べると2〜3度違っています。現在はペアガラスやトリプルガラスがどれくらい光を遮るか波長に注目して研

究しています。

人間は朝日の白い光を浴びるとしっかりと目をさますことができます。省エネ性だけでガラスの種類を選んで良いかと考えています。

林採光という面も住まいの健康を考える上で必要な観点ですね。

菅原私は最近省エネなどの観点からも注目されている「緑のカーテン」を研究しています。

キュウリ、ゴーヤなどの葉っぱを通して太陽のスペクトラムがどれくらいカットされるのかを調べています

調査の途中で、まだ何とも言えない状況ですが、葉っぱ自体に赤外線をカットする力があるので効果はあるのではと期待しています。また、葉の気孔からは水分が蒸発しているため、葉の間を通り抜けてくる涼しい風が室内の温度が上がるのを抑えてくれるようです。今年は、雨が降ら



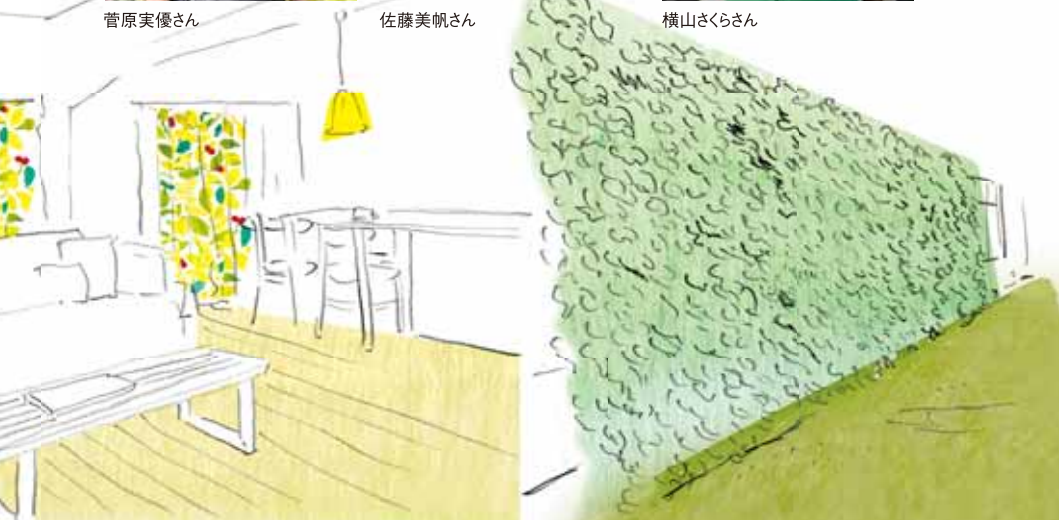
菅原実優さん



佐藤美帆さん



横山さくらさん





難波亜也加さん



水野 令子さん

啓発していくことも 大切な住環境研究のひとつ

林 次世代に住まいの健康について伝えていくことも大切な研究のひとつです。家庭科の先生方がわかりやすく子どもたちに住環境について教えることができる手法を研究しています。

水野 私が研究しているのは家庭科の授業などで使える手作りの実験装置の開発です。実際に高校生と一緒に、ペットボトルを家に見立てて、すだれ、カーテン、断熱材で覆った装置で、遮熱・蓄熱について実験しました。太陽を見たてた電球によってどのぐらい温度が上昇するかを体験してもらいました。

林 高校生の反応はどうでしたか？

水野 熱心に楽しみながら勉強してくれました。どうやったら夏を涼しく過ごせるかを肌で感じてもらえたと思います。簾

が一番温度変化が少なく、カーテンが良く無かったという発見もありました。

難波 私は今学内の電力カットに関する取り組みをしています。告知ポスターを貼ったり、照明を部分的にはずしたり、電力が超えそうになったら放送で「エアコンを消してください」と声をかけたりする中、1日1日電力がオーバーしていないかデータを集めて検証しています。

地震や電力問題だけのためでなく地球環境のためにやってほしいということを啓発していくためにアンケート調査などもしています。

林 住まいは人の暮らしの原点にあるものです。多くのゼミ生や大学院生の努力の成果によって、新しい住まいづくりの提案もできてきています。地球環境時代のライフスタイルや建築デザインを目標に、持続的な研究を続けていきたいですね。





残された「歴史」を学ぶ。

人間文化学科 大平 聡 教授



小学校に残される 貴重な歴史資料を掘り起こす

身のまわりにある歴史資料を発見し、歴史を掘り起こす作業を行っています。現在学生と集中的に行っているのは、戦時中の小学校の資料の調査と保全活動です。

宮城県の公文書館でも、戦間期の資料はほとんど残されていませんが、学校日誌などの学校の資料には、戦間期の

情報が豊富に残されています。例えば、軍事教練や防空演習、出征兵士見送り、村葬などが克明に書かれています。学校日誌は、戦時下教育や地域の暮らしぶりを知る上で第一級の歴史資料ですね。ぜひとも後世に伝えたいと学生とともに活動しています。

学生にとつても貴重な資料に出会える千載一遇のチャンスだと思っています。資料を残してくださった方々に感謝しつつ、ただ自分の興味・関心を満たすだけでなく、いろいろな情報を伝えることでお役に立たんければ、という想いで研究して欲しいと思っています。

外に出てリアルに学ぶ そこに本物との出会いがある

私の研究の柱の一つは正倉院文書の研究で、毎年、ゼミの学生を連れて奈良国立博物館の正倉院展へ行っています。

学生時代から築いてきた人脈を頼りに、普段は見せてもらえない貴重な資料も見せてもらっています。学生に本物を見せてあげたい、本物の研究者から直に話を聞かせてあげたい、と考えています。

学生にはなるべく「外に出よう」「いろんな場に立とう」と話しています。ゼミの卒業生は、卒論で経験したことが職場で活かしていると語ってくれています。例えば戦時中の学校教育の体験者への聞き取り調査を100名近くの方々に行つた卒業生は、その時の経験を通して、年上の人との話し方を学び、就職して営業職でも役立っていると言っています。

人から話を聞くこと、そしてそれをまとめる、ということ。そうした作業を総合的に行うのは、とても貴重な経験です。学生ならではの経験をぜひ積み重ねて欲しいと思っています。

Profile

大平 聡 教授 神奈川県横須賀市出身、横浜市で育つ。横浜国立大学教育学部卒業。東京大学大学院修士・博士課程を経て、1990年より本学勤務。

○信条「楽しくなければ大学ではない。自分の居場所は自分で良くする。」

私のおすすめ本

きけわだつみのこえー日本戦没学生の手記

日本戦没学生記念会編集

学生時代の思い出の本です。戦没学生の手記で、私自身、二度目の大学入試に失敗して絶望しかかっていた時、学べることで幸せじゃないかと立ち直るきっかけを与えられました。新しい世代にも読み継がれて欲しいと思います。



これが学びのツボ!

歴史には数学のような方程式はなく、どんな材料を基にして、それをどう解釈して、一つのストーリーを作っていくかです。あの先生はなぜこの問題を取り上げて、どんな材料から導くのか、その過程を知ることが大切です。



「食」から人の生活を学ぶ。

食品栄養学科 大山 珠美 准教授

栄養の知識だけでなく、「プラスα」の感覚を磨く

私の担当する栄養教育は、生活者がいかに食べ物を選択し、取り入れ、体の中から健康になるかを考えます。

健康であること、そのために栄養バランスを整えることはとても重要です。しかし、人間はそれだけでは満足しません。目で見て、香りや味を楽しんで、何からどのように作られているかを考えて…と、五感を使ってこそ豊かな食生活といえます。栄養だけでなく、食を通して心も暮らしも豊かになる「プラスα」の部分も大切なのです。

ゼミや基礎演習で重視しているのは、とにかく身近な食を「知る」こと。私たちが住む宮城県は二次産業が盛んで、野菜が年中豊富です。食材や生産者について見識を広げれば、地産地消の意

識も高まります。

「知る」ことで、世の中に氾濫するさまざまな情報に対する「判断力」も身に付きます。「〇〇だけダイエット」など、正しい知識がないばかりに健康を害しかねない食事制限をする人もいますから。そして、管理栄養士を目指す学生は特に、学んだことや正しい情報を「伝える」力も必要になります。

身近な「食」を通して世界とのつながりを実感する

私たちの豊かな食生活がどのように成り立っているのか、常に意識することも大切です。そして、その答えも実はとても身近にあります。

例えば、基礎演習でテーマに取り上げたのはトウモロコシ。普段何気なく口にしていますが、ほとんどが多くをアメリカからの輸入に頼っています。また、飼料や

甘味料、バイオエネルギーなど世界各国で多岐に利用される一方で、環境破壊を招いている現実もあるのです。

学生たちは、食べるという日常の行動の中にあるさまざまな発見や、世界とのつながりを実感できたようです。

食はあまりにも生活に密着しているため、立ち止まって考える機会がありません。けれども、身近だからこそいくらかでも課題が見つかる。それがこの分野で学ぶ一番の面白さだと思います。



Profile

大山 珠美 准教授 東京都出身。女子栄養大学大学院修士課程修了。管理栄養士。大学助手、東京都健康づくり推進センターを経て2002年より本学勤務。

〇信条「後ろに道はない。目の前の道に笑顔で進もう。」

私のおすすめ本

エビと日本人Ⅱ 暮らしのなかのグローバル化 (岩波新書) 村井吉敬著

世界有数のエビ消費国である日本。ほとんどを輸入に頼っているにも関わらず、エビが日本に来るまでの経過はあまりに知られていません。私たち日本人の食と、それを支える自然環境や第三国の人々との関係を考えさせられる一冊です。



これが学びのツボ!

学んだことを実生活に生かしてみる。そして身近なことをきちんと見る、気づく、考えること。食べて終わりではなく、体にどうなのか、生産者は誰なのか、そこから社会も見え、世界とのつながりも感じられます。

「地域の力になりたい!」熱い想いとともに……

「MG 災害復興ボランティア」 座談会



本学は、建学の精神に基づき、地域の復興に寄与するべく、学生たちのボランティア活動をサポートしています。今回は、「巨理町聞き取り調査」(被災の記憶を残す)の千枝恵子さん、「食のほっとタイムプロジェクト」(被災地への食事支援)の齋藤和恵さんと高橋比呂映さん、「被災した小学校での子ども支援」の本内さくらさん、「大震災復興支援コンサート」の齋藤友梨さんに集ってもらい、ボランティアの現場の状況や活動を通じて感じたことなどを話し合っていました。

感動したこと

千枝 (聞き取り調査) お相手が緊張していることもあり、1時間という設定でインタビューしても、すぐに終わってしまうことが多かったのですが、世間話などを交えて、和やかな雰囲気作りを心がけました。結果として1時間以上もお話しできたり、雑談から貴重な証言が飛び出したりしたときは、自分がしていることは無駄ではない、と思えました。

高橋 (食のほっとタイム) 私たちの作った食事を、本当に涙をうかべて喜んでくださって。厳しい環境にいる人たちの、明日への活力に少しでもつなげることができて、普段は忘れがちな、やりがいを感じました。



国際文化学科4年
千枝恵子さん



音楽科4年
齋藤友梨さん

本内 (子ども支援) 校長先生や教頭先生から、とても助かっているというお褒めの言葉をいただきました。でも何より、子どもたちの反応です。落ち着いて座っているのが難しい子などに、1日つきっきりでケアをする。それは自分たちがボランティアとして入ったからこそ、できたことです。時間をかけて打ち解けて、例えば保健室に入り浸りだった子が授業に出席できるようになって、「さくら、次に来るのは何曜日?」と聞かれたときは、本当にうれしかったです。
齋藤 (支援コンサート) 歌のパワーは本当に大きいと実感しました。「ふるさと」を合唱したのですが、その場のみんなが歌ってくださいました。なかには、涙を流しながら歌ってくださった年配の方、手話を交えなが

ら口ずさんでいただいた方も……。本当にその場が、一体となった気がして、自分も泣きそうになりました。

つらかったこと

千枝 (聞き取り調査) 避難時の状況について短時間で集中して聞かなければいけないからため、お話ししていただける方の心に傷に触れてしまうなど、様々な不安と葛藤がありました。そうした部分は、自分なにかでも、まだ消化しきれいていません。

齋藤 (食のほっとタイム) 食事の提供そのものについては、もちろん喜んでいただけるのだけれど、現場では、単純にそれだけでは済まされない、デリケートな問題があります。例えば、私たちはたまに訪れて、良質の食材を使って、「美味しい料理を作る。でもそのこと」によって、それ以外の毎日、限られた条件で調理をしている方たちのがんばりが、過小評価されてしまうというか、見過ごされてしまうというか。善意で行っていることが、必ずしも良い結



食品栄養学科4年
高橋比呂映さん

食品栄養学科4年
齊藤和恵さん

果だけを生むわけではない。「食」に携わる上では、そうした全体に目を配らなければいけないのだと、思い知らされました。

本内(子ども支援) 何でもやります、という学校へうかがったのですが、仕事はあるはずなのに、それをなかなか割り振ってもらえないときなど、もつと使つて欲しい、という気持ちがありました。ただ、現場の先生たちもとまどつただろうし、「お客さん」をどう扱うか、難しい部分もあるのだと思います。潜在的なニーズを、自分たちの仕事として形にしてい

くには、ただ待っているだけではだめで、積極的に自分から飛び込んでいく。そういう強さが必要だと感じました。

斎藤(支援コンサート) 今回の合唱は、音楽科の通常のコンサートとは異なり、野外で、しかも通りがかりの人の足を止めて聞いていたかなければなら

ないという、条件的にはとても厳しいものでした。もちろん、だから鍛えられた部分もあります。

学んだこと

千枝(聞き取り調査) 自分は知っていたつもりのことでも、よくよく話を聞いてみると、見えなかった部分が見えてくる。こちらの聞く姿勢によつて、相手の話す内容も変わる。コミュニケーション能力の大切さというか、単に表面的に会話をうまく回せばよいわけではないことを、肌で理解できた気がします。

高橋(食のほととタイム) 栄養士を目指す意欲が高まったというか、単に美味しいものを作る、栄養バランスを整えるというだけに留まらない、「食」の価値というものを、改めて見直したし、新たな興味も持てました。年齢も生活環境も多彩な人たちでしたが、それぞれに合った「食」の姿がある。食べる方や調理条件によつて、考慮点が大きく異なる。変化する状況、限定された条



食品栄養学科4年
本内さくらさん

件への対応が、「食」のボランティアの現場ではとても大切だと、痛感しました。

本内(子ども支援) 当たり前のことかもしれないですが、子どもの笑顔こそが先生の元気の源だと感じました。教員の仕事はとても大変で、つらいことも多い。でもだからといって、逃げ腰になつてはダメ。子どもに積極的に関わつて、心のケアに気を配れば、さつと笑顔で応えてくれる。教育の現場への不安もありましたが、これからは迷わず教員を目指してがんばれそうです。

斎藤(支援コンサート) 今まで私は、スキルアップや高評価を得るため、つまりは自分のために歌っていた面がありました。だから選曲もそのための、自分が歌いたい歌でも、チャリティーは聞く側の視線で考え

ることが必要。技術士の、どうすれば聞く人の心に残る演奏ができるのかを真剣に考えたことは、卒業後、社会に出て演奏を続けていきたい私にとつて、本当によい経験でした。



大学講堂を一般貸出

東日本大震災により、宮城県内の催事施設の多くが被災し、現在も使用できない状況が続いています。この状況を受けて本学では大学講堂を原則無料で一般にお貸しする支援活動を行っています。

7月2日仙台二高 吹奏楽コンサート、7月14日北仙台中学校 合唱コンクール、9月4日～8日仙台市教育委員会「劇団四季『こころの劇場』」、10月10日合唱連盟 宮城県合唱祭、10月11日のラン・ラン仙台復興支援イベントなど、プロ・アマチュア問わず震災の影響で施設の確保が困難になった音楽会イベント等で利用いただいています。



Action

いま、 私たちにできること。

本学では大学にある人材・資源を活用した様々な震災復興活動を行っています。今回はその復興活動の活動状況の一部を紹介いたします。



みやぎ・わらすつプロジェクト

震災の被害を受けた県下の幼稚園・保育所の子どもたちを支援しています。全国の保育関係者から保育に必要な備品、教材、おもちゃなどを集め、必要とする幼稚園、保育所に届けています。

プロジェクトでは、物だけではなく、人も心も届けようと、児童教育学科・磯部ゼミの学生が中心となつて、子どもたちの遠足や夏祭りの支援をしたり、環境整備のためのお手伝いもしています。

楽譜サポートプロジェクト



今回の震災で、楽器や楽譜をなくされた方も少なくないと思います。「被災地の大学音楽科だからこそできる活動を」と音楽科の野沢真弓・大内典両教授らが中心となり、被災者に楽譜や音楽参考書を贈る「楽譜サポートプロジェクト」を始めました。

被災された方から、「ピアノを始めとするクラシック音楽の楽譜や音楽学習のための参考書の要望を受け付け、寄贈されたストックの中からお送りしています。

美術作品保全活動

人間文化学科・井上ゼミでは東日本大震災で建物に被害を受けた仙台市内の美術館で、作品保全活動のお手伝いをしています。学芸員資格を持つ大学院生と、資格の取得をめざす学生たちが参加しています。

「共生福祉会福島美術館」では、建物にヒビが入り、貴重な美術作品が危険な状態になったため、作品を梱包し、安全な場所に移動するボランティア活動を行いました。



復興TV

震災復興に向けて活動している県内の若者を取材し、YouTubeにUPするという取り組みを行っています。メンバーは本学心理行動科学科3年佐藤ゆかりさんが中心となり、仙台市内5大学から集まった11名の学生有志です。

現在の復興支援活動を残しておくことは、今後日本だけでなく世界のどこかで震災が発生した時に、とても有意義な情報源になると思います。



<http://www.youtube.com/user/HukkouTV311>



きらめく銀化玉のように。
人生の新しい出会いは
大切にしたい「宝物」です。

[取材]
広報室インターンスタッフ
工藤 惟 (英文学科4年)
大友 翔子 (英文学科2年)

——すぐキレイですね。銀化玉ってどんな風に作るのですか？

ガラスの透明感と銀の質感が微妙に交わりあって素敵でしょう。鉛ガラスにコテやピンセットなどで銀箔を溶かしつけ、散らすことによつて透明な宇宙を感じさせる模様が生かされていきます。

想像を超える色めや風合いとの出会いに毎回ドキドキしますね。パーナーの種類によつても全然でき上がりが違ってくるんですよ。自分でコントロールできない神秘的な美に興味を持っています。

——ガラスに興味を持たれた理由は何だったんですか？

大学4年の夏、トンボ玉の展示会を見たのが興味を持った最初でした。そこで市内のトンボ玉作家の工藤正昭さんの実演を見たことで私の人生が変わりました。翌日に先生にお会いして入門させていただきました。大学生で弟子になっていたのは私だけでしたね。

私なりの手法が定まったのは、大学院時代に古代ガラスの銀化現象に魅せられ



美しい色彩の宇宙を描くトンボ玉。



目を見張る繊細な模様、まるで生命をはらんだよう。



予想しない美しさを見せてくれるのが魅力です。



炎の使い方によつても出来上がりが変わります。

た時です。銀化というのはガラスが何百年もの間剥離を繰り返して、作られた層に光が乱反射する現象。この美しさに触発されて試行錯誤の上、私なりに編み出したのが銀化玉という手法です。

——ガラス玉って、生きているみたいですね？

そうなんです。生命感をはらむガラス玉を作りたいと思っています。だから、モチーフは自然の中にある木の実や植物、貝殻などです。

ガラスにパーナーを当て、こてやピンセットを駆使。カタツムリを作る場合は、炎の外でけがき針を回転させて殻のうずまきをつくりまわします。植物に見立て鉢植えするものも人気がありますよ。

——ガラス玉を見てるとなぜか気持ち落ち着いてきますね。

子どもたちに夢や希望を与える力もあると思っています。今私は「北の匠の会」

というトンぼ玉作家のグループに所属しているのですが、タイラー基金とタイアップして小児がんの子どもたちに提供するハンドメイドビーズを募る活動をしています。

つらい治療を乗り越えてきた証として首飾りにしてつけてもらいます。今後の治療の励みになればと思っています。

——最後に私たち後輩にアドバイスをいただけますでしょうか？

英文科で学び大学院に進みました。直接現在の職業に関わっていませんが、ガラスも英語も、好きなものを追いかけてきたことは幸せでした。

若い人達は可能性を大切にしてください。宮城学院で学び、そして交友関係を結んだ友人や尊敬すべき先生方との思い出は一生忘れられない大切なものです。小さなガラス玉が大きな宇宙を抱いているように、小さな出会いに人生を変えるような大きな宝物が隠れているかも知れません。

Profile

鈴木藍子さん

1998年 大学院英語・英米文学専攻修了。

1995年 環の華トンボ玉工房 工藤正昭氏・大泉マサ氏に師事。1999年 銀華ガラス玉工房として活動開始。2006年第一回ジャパンランブワークソサエティ公募展入選。2008年 東北の作家10人展(ぎやうらん・花名古屋) 出品。

銀華ガラス玉工房

仙台市若林区成田町129-6
TEL 022-293-6323

鈴木藍子さんのブログ「SPIRA MIRABILIS 銀化玉の世界」
<http://ginkaiko.blog20.fc2.com/>

「北の匠の会」
<http://kitanotakumi.jj.cx/>

サークル紹介 01

手話サークル

- 部員数：73名
- 活動日：月・木曜日
- 活動場所：C405 教室

みんなが楽しめる手話ソングです。

現在、毎年恒例で行っている大学祭での手話ソング披露に向けて練習しています。演目は YUI の「It's My Life」やドリカムの「何度でも」など。みんなが知っているポップスなどを選び、手話辞書を調べながら手話を決めていきます。CD をかけながら練習しているのですが、とにかく音楽と手話をぴったり合わせるのが難しいですね。

大学祭当日、中庭で大勢が一斉に手話ソングをやる光景はなかなか壮観。これを機会に手話に関心を持っていただけたら嬉しいです。

たくさんのメンバーで楽しく。

平日は30分くらいの練習。平日昼休みのみの活動なので、他サークルやバイト、勉強との両立が可能ですよ。

手話という難しいというイメージですが、手話ソングから入れば身体が自然に動き楽しみながら練習できると思います。

参加人数も増えて楽しい活気のあるサークルになっています。今後は会話力も身につけていきたいと思っています。



大学祭でお披露目!



しっかり体が覚えます。



部長
長谷川悠華さん
(生活文化デザイン学科3年)

サークル紹介 02

陸上部

- 部員数：21名
- 活動日：火・木曜日
- 活動場所：グラウンド

本格派から初心者まで楽しく練習!

走ること、体を動かすことが大好きなメンバーが、短距離から中・長距離、円盤投げなどの投てき競技まで、幅広い競技のトレーニングに励んでいる陸上部。2010年の「杜の都全日本大学女子駅伝」において、東北学連選抜チームの最終区ランナーとして市内コースを駆け抜けた金間なつみさんも在籍しています。

また、「全日本インカレ」をはじめとする大会や各種記録会へ出場したり、ほかの大学と交流し練習しています。

上下関係のないアットホームな雰囲気が魅力。

競技として本格的に取り組む人も、趣味として健康的な体づくりに励む人も、それぞれのペースで無理なく、楽しく活動できるところがいちばんの魅力です。

先輩・後輩の仲がとても良く、学科やコースを超えたコミュニケーションも楽しいですよ。普段の練習以外に、歓送迎会や忘年会、新年会といったイベントもあります。陸上の経験がない初心者でも大丈夫です。私たちと一緒に体も心もリフレッシュしましょう!



みんな仲良く頑張っています



金間さんが私の部を卒業!



部長
吉野文さん
(人間文化学科2年)

「ウフ・カフェ」開店

7月4日、ピエリス(学食)向かいのティールームがリニューアルオープンしました。「さなぎプロジェクト」の一環として、メニューやインテリアを学生が「一緒に考えて作り上げたお店です。名前はフランス語のタマゴ(oeuf)から名付けた「ウフ・カフェ」。以前と



比べてとっても明るくなった室内は、連日、大変なごきわいをみせています。手作りのパンは持ち帰りもできるので学生に人気です。

「ユタと不思議な仲間たち」公演

大学講堂にて、9月5日～9月8日の4日間にわたり、劇団四季「ころの劇場」の公演が行われ、市内の小学生約9000人が鑑賞しました。仙台での「ころの劇場」公演は、例年「アズミティ21」を会場としていましたが、震災により利用が不可能となり、本学の大学講堂を貸し出すことになりました。演目は梶賀千鶴子(日文卒・非常勤講師)作「ユタと不



思議な仲間たち」。生命の尊さ、仲間の大切さ、などをテーマにした感動の舞台となりました。

「ピクサー」の
フライアン・フィー氏来校



7月1日、ピクサーアニメーションスタジオのストーリーアーティストであるフライアン・フィー氏が本学を訪れました。ピクサーは「トイストーリー」に代表されるディズニー3Dアニメを制作しているアニメーションスタジオで、今回は新作「カーズ2」のプロモーションをかねて来日されました。ピエリス(学食)で特別講義が行われ、ラフスケッチ段階の動画を交え、最先端のアニメーション制作工程に関するお話を1時間に渡り講義していただきました。また、本学の学生が日本のファンに向けたメッセージや作品の見どころなどを英語でインタビューしました。

小学生のための
サマーカレッジ2011開催

8月9日、10日に行われ、市内の小学生から6年生まで、総勢45名が参加しました。1日目は、自然豊かなキャンパスを散策するなかで、疑問に感じたことを集めて、自らの力で調べるワークショップ。2日目は、自作アドバルーンで空気の不思議を実験したり、目の錯覚が生まれるフシギな貼り絵をつくったりと、本学教授陣による様々な発見教室が行われました。教科書だけにとどまらない「自分自身で追究する学び」こそが「面白い」ということを発見する2日間でした。最後に参加した小学生ひとり一人に顔写真入り「修了証書」が手渡されました。



公式 facebook ページ誕生! <http://www.facebook.com/mgu.ac.jp>

タイムリーな情報発信とグローバルな交流の場を目指し、宮城学院女子大学公式 facebook ページが誕生致しました。ぜひ「いいね!」をクリックしていただき、国内外を問わず交流の場としてご利用下さい。また、災害時には緊急連絡ページとして大学から情報を発信致します。

編集後記

今この原稿を125回目の創立記念日に書いています。今日はこの3月に卒業した人たちがキャンパスに戻ってきました。彼女たちにはちゃんとした卒業式をしてあげられませんでした。で、半年遅れの卒業パーティです。平成23年3月11日14時46分。私たちは誰であれこの日この時を忘れることはないでしょう。

本誌で紹介したように学生たちはこうした状況にあっても負けずくじけず人々のお役に立ちたいと様々な活動に取り組んでいます。人の痛みと苦しみに悲しみに寄り添うことで彼女たちはきっと人として大事なものを学んでいることでしょう。

なお今号より本誌の「紙」が変わりました。こんなところにも震災が影を落としています。

(M・F)



Letter Essay

愛と人間の哀しさ —木下順二『夕鶴』—

3月11日のあの時以来、宮城学院は組織を挙げて、被災からの復興のため多方面の働きをしてきた。Partirの本号にはその一端が紹介されている。では、その活動の根底には何があるのだろうか。この5回連続のエッセイは、宮城学院の精神を訪ねる旅である。

男に助けられた動物がその男の妻になって恩返しをする、という話(動物報恩譚)は世界各地にあるという。その一つ、佐渡島に伝わる「鶴女房」という民話をもとに、木下順二は『夕鶴』という民話劇を書いた。第二次世界大戦中の1943年のことである。

戦後の1949年に『婦人公論』(当時の婦人公論は、「自由主義と女権の拡張をめざす」高級な言論雑誌だった)1月号に発表されたこの戯曲は、その後、山本安英が鶴の化身「つう」を演じることによって、演劇界のみならず、広く、第二次世界大戦後を生きる人々に影響を与えた。オペラや能の形式でも演じられ、外国語にも翻訳され、中学や高校の教科書にも数多く採用された。

ぼくが『夕鶴』に出会ったのは、鎌倉市立第一中学校の生徒の時だった。中学校の演劇部による文化祭公演だから、それほど水準の高い舞台だったとは思えないが、いたく感動した。

60歳を過ぎた今でも、戯曲を目で追うだけで、目頭が熱くなる。「つう」を女房とした純朴な百姓「与ひょう」が友人にそそのかされて金や都会に魅せられるようになり、ついには「つう」との約束を裏切ってしまう。その変化は哀しくも真実味を帯びており、人間の性(さが)を凝縮している。

宮城学院女子大学 学長 海野 道郎

MG archives



1897(明治30)年バイブルハウス(写真後方)が竣工。

宣教師よりキリスト教の伝道活動に必要な教育、訓練を受けたバイブルウーマンは、教会の集会に出席し、宣教師のヘルパー、病人の訪問、聖書の読み説き、編物の指導、農繁期の託児等々、様々な奉仕活動を展開した。1900(明治33)年には「聖書専攻科」がスタートし、1941(昭和16)年、戦争のため廃止されるまで続いた。

宮城学院のよき伝統として「奉仕」の精神が今なお息づいている。

(写真・文 宮城学院資料室)